

研究ノート

リズムダンスにおける恥ずかしさを軽減する効果について —アフォードされる環境に着目して—

濱田 敦志

The Effect of Reducing Embarrassment in Rhythm Dancing:
Focusing on the Available Environment

HAMADA Atsushi

要 旨

体育授業のリズムダンスは、恥ずかしさが大きな原因で曲調に合わせて自由にノリを楽しむことができない。恥ずかしさの一番の原因は、他者の視線であり、見られている身体を意識することによりノれない、踊れない状態になると考えられる。体育館を暗くして他者からの視線を軽減すると学習者の身体はどのように変容するだろうか。また、ミラーボールを使って非日常を演出すると学習者の身体はどのように変容するだろうか。

体育館を暗くしただけでもノリやすい環境になることが分かったとともに、ミラーボールを使って非日常を演出することで、さらにノリやすい環境を提供することができることが明らかになった。

キーワード

リズムダンス 恥ずかしさ 心身の解放 アフォードダンス

目 次

- I. 問題の所在
 - II. リズムダンスでの悩み事
 - III. 表現領域の恥ずかしさ
 - IV. アフォードダンス理論
 - V. 検証授業
 - VI. 結果と考察
 - VII. まとめ
 - VIII. 今後の課題
- 引用文献

I. 問題の所在

表現領域のリズムダンスは、恥ずかしさを伴うために指導が難しいとされる。公開授業などでリズムダンスの授業を参観したことが何回かあるが、どの授業も子どもたちはノリノリで踊っていた。それらの授業に共通することは、女性教員で、踊れる身体を持ち、子どもたちをぐいぐい引っ張っていく指導であった。このようなスーパーティーチャーでなければ、リズムダンスの授業は成立しないのであろうか。

今回検証授業を行った大学生の「小学校のときのリズムダンスの経験」では、133人から回答を得た。A 体育授業で単元としてリズムダンスに取り組んだ経験を持つ学生は10人(7.5%)であった。B 運動会のリズムダンスとして決まった型のダンスをした経験を持つ学生は94人(70.6%)であった。リズムダンスの経験がない学生は31人(23.3%)であった。

小学校学習指導要領解説体育編¹⁾には、3・4年生の表現運動の中で取り上げられているが、「リズムダンスでは、その行い方を知るとともに、軽快なロックやサンバなどのリズムの特徴を捉え、リズムに乗って弾んで踊ったり、友達と合わせたりして即興的に踊ること。」と記載されている。曲調に合わせて自由にノリを楽しむダンスを経験した学生は大変少ないのである。子どもたちをノリノリにすることが難しいため、敬遠されていると考えられる。

村田²⁾(2008)は「『自由にリズムに乗って踊る』という技能の学習が記載されているにも関わらず、ダンスの授業は『定型の振り付けを覚えて踊る』という学習内容であると誤解されてきた」と述べている。

20年が経過した現在でも、学習指導要領が意図す

るリズムダンスの授業が展開されていないことがうかがえる。

II. リズムダンスでの悩み事

1998・1999年度の体育科及び保健体育科学習指導要領の改訂により、ダンス領域に「リズムダンス(小学校)」、「現代的なリズムのダンス(中学校)」が導入された。また、2008年度の中学校学習指導要領の改訂では、多くの領域の学習体験をさせた上で、自ら適した運動を選択できるようにすることを目的として、中学校1・2年生においてダンスが必修化された。

生関ら³⁾(2019)の調査によると、「リズムダンスにおける悩み事の上位3項目は、『示範ができない』、『良いダンス(動き)が分からない』、『指導内容が分からない』であった。」と報告している。動きを覚えさせなければならないという傾向が強く表れていると考えられる。これでは、学習指導要領が意図する「曲調に合わせて自由にノリを楽しむダンス」を展開することはできないだろう。まずは、この意識を改革する必要があるのではないだろうか。

III. 表現領域の恥ずかしさ

畑野ら⁴⁾(2010)は「『表現』の授業実施を継続するために教員が感じている最も大きな阻害要因は、児童の『恥ずかしさ』である」と報告している。また、「これは、教員自身が『表現運動』をすることへの『恥ずかしさ』を感じていることにも繋がるのではないかと推測される。」と述べている。

恥ずかしさの一番の原因は、他者の視線であり、見られている身体を意識することによりノレない、踊れない状態になると考えられる。

堤⁵⁾(1992)は、「我々の日常経験では、親密な関係の前者に対しては、いかに未熟でやましい自己を曝そうとも、さほど羞恥を感じる必要はない。一方、その存在がわたしにとって殆ど意味を持たぬ『他人』に対してもまた同様である。問題は、このいずれにも定位できぬ、多くの中間的な『他者』である。我々が最も羞恥を感じる対象は、実は、まなざしを介して『わたし』に侵入してくる虞れのある、全くの『他人』ではなく、それでいて未だ『自己ならざる』ところの、関係が曖昧な領域にあるこの第3の他者であ

小学校のときのリズムダンスの経験

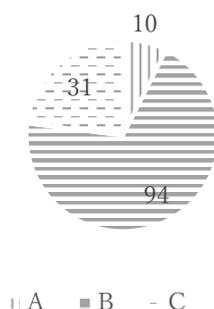


図1. 小学生のときのリズムダンスの経験

る。なぜなら、自己は他者との関係において初めて位置付けられるものであるが故に、その他者の存在性が不確定であることは、そのまま自己像の不確定さを意味することになると考えられるからである。」と述べている。

内山⁶⁾(2013)らは、クラスメイトがこの第3の他者当たると位置づけている。すなわち、クラスで行うリズムダンスの授業は、恥ずかしさが増大すると考えられる。

恥ずかしさを軽減する目的でいくつかの先行研究があるが、畑野⁷⁾(2017)らは、小学校教員を目指す教員養成課程の学生を対象に7回の授業で検証しているが、活動の質がよくみんな楽しく取り組むことで、慣れていき恥ずかしさが軽減していくと述べている。

森脇⁸⁾は(2019)「子どもたちの授業の空間への『慣れ』が、『恥ずかしさ』を軽減させる、学習形態が影響し、活動しやすくなるようだ。他者とかかわり合うことで自然と動きが変化する『場』を生成させることにより、他者とかかわりが担保され、『恥ずかしさ』が軽減させることができるのではないだろうか」と述べ、「子どもたちに授業の空間に慣れを生じさせる」「情動的相互作用と心理的相互作用が生まれる『場』が生まれるように設定する」などのしかけをつくり、「場」が展開するかじ取りをすることで表現運動領域の「恥ずかしさ」を軽減させることに効果的なのではないかと考えている。

どちらの研究も慣れや相互作用という関係性を生じさせることによって恥ずかしさが軽減されることを述べているが、他者からの視線を軽減させるものではない。

IV. アフォーダンス理論

佐々木⁹⁾(1994)によると、アフォーダンスとはアメリカの知覚心理学者であるJ. Jギブソン(James Jerome Gibson)が与える提供するという意味の英語 afford からつくられた造語であり、ギブソンは「一定の対象の一定の特性(かたち、大きさ、色、肌理、構成、運動、動き、他の対象に対する位置)が知覚されるとき、観察者は、それらのアフォーダンスを検知し続けることができる。私のこの造語は、古い哲学的な意味の重荷を背負う価値という語の代わ

りである。私は、この語で、良くも、悪くも、単純にものが与えることを意味する。」と述べている。

さらに佐々木¹⁰⁾(1994)は、「アフォーダンスとは、環境が動物に提供する『価値』のことである。」と述べているように、モノや環境が人間に与える意味や価値のことと捉えられる。

河原で小石を見ると、川に向かって投げたくなるだろう。それは、モノの小石と河原という環境が「投げてください」と情報を発信しているということになる。また、セーフティーマットを見ると飛び込んでみたくなるだろう。それは、モノのセーフティーマットが「わたしは柔らかいよ」という情報を発信しているからである。しかし、ここで注意をしなければならぬのは、モノや環境がいかにも情報を発信していたとしても、その情報を受信する側がスルーしてしまっただけで誘発されることがないということである。つまり、それらの情報を感知する身体とセットでアフォードされるということになるだろう。

リズムダンスにおいてこのアフォーダンス理論に当てはめて考えてみると、音楽にアフォードされて踊り出すということになる。そこには情報を受信できる踊れる身体が必要になってくるだろう。しかし、人類の歴史を振り返ってみると、祭りやカーニバルなどの非日常の機会に、ダンスは常に密接に関わってきた。そもそも、人間には踊るという本能が備わっていると考えられるのではないだろうか。

表現領域の恥ずかしさを軽減させるためには、慣れや関係性のほかにも、体育館を暗くして他者からの視線を和らげることにより、見られる身体への意識を軽減することによって踊りやすくすることができるのではないだろうか。また、ミラーボールを使って非日常を演出することによって、色とりどりの光線にアフォードされてノリやすく踊りやすい環境を提供できるのではないかと考えられる。もう一つの環境として、衣装にも目を向けてみた。非日常を演出するため、祭りやカーニバルの時のイメージで、ジャージではなくリズムダンスにふさわしい服装(Gパン、派手なTシャツ、バンダナなど)で来るよう呼びかけた。

V. 検証授業

新型コロナウイルスの影響で昨年度の2年生の体

育実技ができずに3年時の後期へと回された。また、今年度の2年生の体育実技も新型コロナウイルスの影響を受け前期にできなかった授業を後期に回す対応がとられ、比較的近い時期にリズムダンスの授業を4回行うことができた。授業は教師役の学生を決め、指導略案を立てさせ、筆者との打合せをもち、授業内容を検討したのちに模擬授業形式で行った。

教師役の学生との打合せでは、リズムダンスの授業の動画を見せて、教師役が恥ずかしさを捨ててぐいぐい引っ張っていくことの重要性を理解させるとともに、ロック調、サンバ調、沖縄調の選曲もさせた。授業は、どの授業も「円形コミュニケーション座位(写真1、2)、立位(写真3)で軽快な音楽に合わせて体を動かす。二重の円をつくって、内側の円は時計回り、

外側の円は反時計回りに移動しながらロック調、サンバ調、沖縄調のリズムに合わせて楽しむ(写真4)。後半は体育館を暗くして自由にロック調、サンバ調、沖縄調の曲に合わせて楽しむ(写真5、6、7、8)」という流れで行った。

①、②の授業では、授業後半で体育館を暗くしてみることを提案した(写真5、6)。また、③、④の授業では、床置きのみラーボールを4個入手できたため、授業後半で体育館を暗くするとともにみラーボールを点灯することを提案した(写真7、8)。授業後の受講票の振り返りをAIテキストマイニング(<https://textmining.userlocal.jp/>)で分析し、その効果について検討した。

①2021.10.19(火)2年Aクラス41名(教師役4名)



写真1. 円形コミュニケーション(座位)



写真2. 円形コミュニケーション(座位)



写真3. 円形コミュニケーション(立位)



写真4. 二重円



写真5. 暗闇1



写真6. 暗闇2

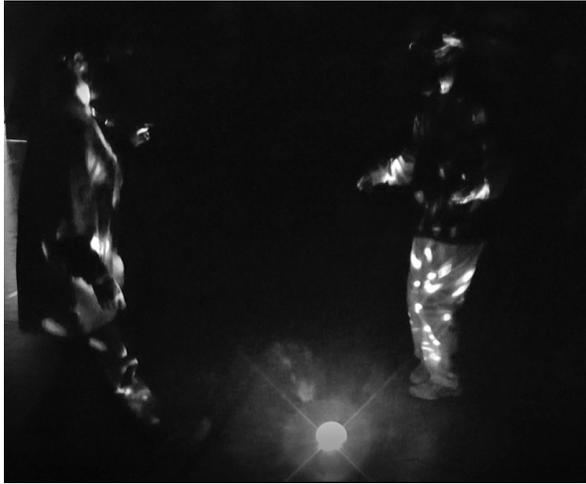


写真7. ミラーボール1



写真8. ミラーボール2

- ②2021.10.20(水)2年Bクラス34名(教師役3名)
- ③2021.12.21(火)3年Bクラス47名(教師役3名)
- ④2021.12.25(土)3年Aクラス33名(教師役4名)

VI. 結果と考察

- ①2021.10.19(火)2年Aクラス41名(教師役4名)

使用曲

ロック調

ハッピーウェディング前ソング：ヤバイTシャツ屋さん

ハッピージャムジャム：M・S・J

サンバ調

samba De Janeiro：Bellini

沖縄調

オジー自慢のオリオンビール：BEGIN

1) 授業の様子

授業の様子としては、教師役の学生が恥ずかしさ

を捨てきれず、その雰囲気が見え、児童役の学生にも伝播してしまい、最後までノリノリになることはなかった。

2) テキストマイニング分析

「恥じらう」「恥ずかしい」「恥」というワードがかなり多く出現していることが分かる。「電気」「消す」「照明」「暗い」のワードから、照明を落とし暗くしたことの効果が見て取れる。形容詞の出現頻度では「恥ずかしい(21回)」「難しい(19回)」「楽しい(6回)」となっており、ノリ切れなかった様子がうかがえる。

共起キーワードは出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだ図であるが、出現数が多い語ほど大きく、共起の程度が強いほど太い線で描かれる。「電気→消す」「暗い→踊りやすい」という共起の出現から、それほど大きくはないが踊りやすさへ

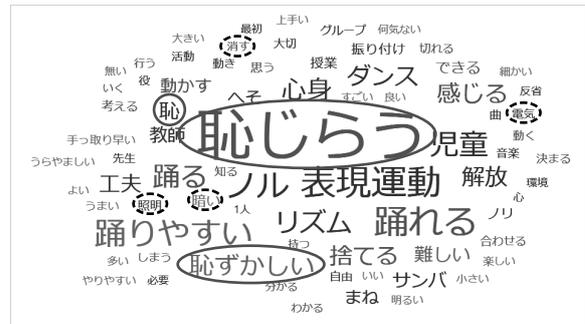


図2. 2年Aクラスワードクラウド

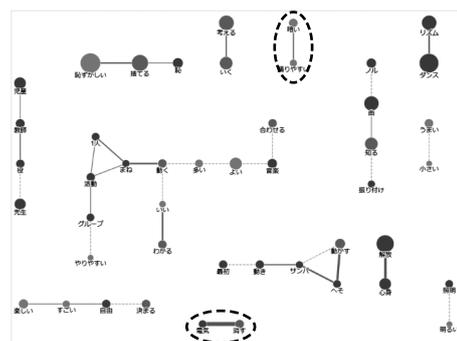


図3. 2年Aクラス共起キーワード

の影響があったと考えられる。

- ②2021.10.20(水)2年Bクラス34名(教師役3名)

使用曲

ロック調

君の瞳に恋してる：ボーイズ・タウン・ギャング
夜に駆ける：YOASOBI

あいつら全員同窓会：ZUTOMAYO

Make you happy：NiZiU

ジャズ調

Sing sing sing：ルイ・プリマ

沖縄調

海のこえ：桐谷健太

1) 授業の様子

教師役の学生がイニシアティブをとり、子ども役
の学生をノリノリに導いていった。子ども役の学生
も先生役の学生に協力しようという気持ちが現れた
授業であった。

2) テキストマイニング分析

2年Aクラスと比較して、「恥ずかしい、恥じらう」
というワードはあるものの、「踊りやすい」というワー
ドが大きく、ノリノリであったことがうかがえる。
「照明」「明るい」「薄暗い」「暗い」「環境」というワー
ドから、照明を落としたことで踊りやすくなったと
感じていると考えられる。

形容詞の出現頻度では「楽しい(22回)」、「恥ずかし
い(11回)」と楽しさの方が勝っている。

「先生—踊る—できる」の共起では、先生が先頭
に立って踊ることで楽しく踊ることができていると
考えられる。「暗い—体育館…照明—雰囲気」では、

照明を落とし暗くしたことで雰囲気づくりができた
ことが考えられる。「環境—つくる—授業」では、
環境によって授業をつくる大切さに触れている学生
が多く、アフォードダンス理論を感じていると考えら
れる。

③2021.12.21(火)3年Bクラス47名(教師役3名)

使用曲

ロック調

CAN'T STOP THE FEELING!：Justin
Timberlake

恋：星野源

Call Me Maybe：Carly Rae Jepsen

Runaway Baby：Bruno Mars

Samba De Janeiro：Bellini

沖縄調

涙そうそう：夏川りみ

1) 授業の様子

教師役の学生がノリノリで児童役の学生をリード
していき、いい雰囲気で学習が進んでいった。後半
の暗闇とミラーボールの点灯した場では、自由にグル
ープを作り、ミラーボールの周りで踊る姿が見ら
れた。

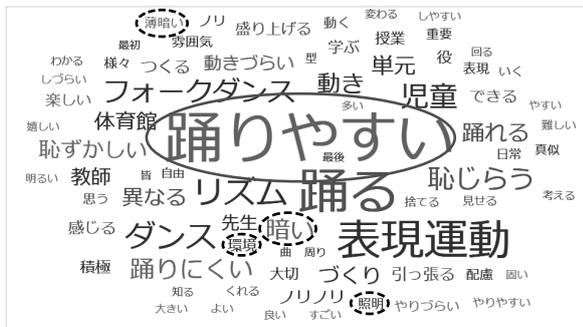


図4. 2年Bクラスワードクラウド

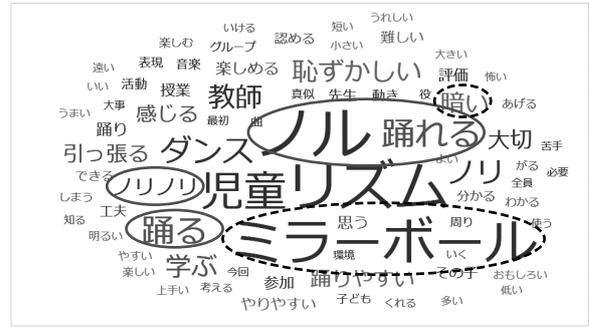


図6. 3年Bクラスワードクラウド

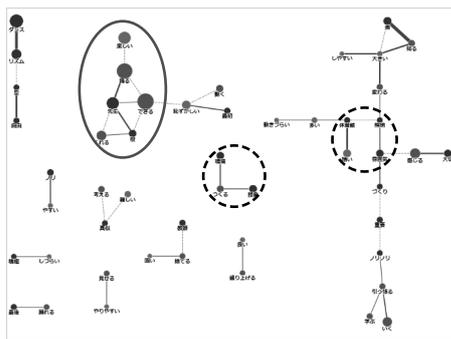


図5. 2年Bクラス共起キーワード

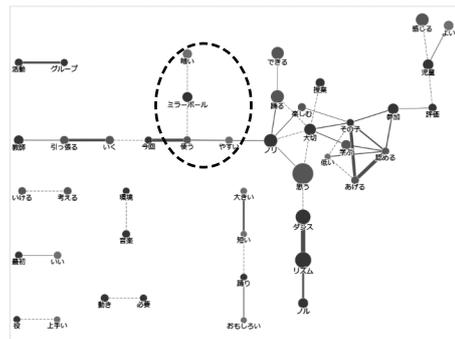


図7. 3年Bクラス共起キーワード

そも何をしているのか、その構造を明らかにするとともに、いまもっている力で十分楽しめる場や環境の設定が、学習者を自然と運動へ誘うようになるのではないだろうか。

今回はリズムダンスにおける「恥ずかしさ」を軽減するための環境設定として「暗闇」と「ミラーボール」を準備したが、他の工夫もないのかを検討したい。また、他領域においても効果的な環境設定を模索していきたい。

引用文献

- 1) 小学校学習指導要領解説体育編, 文部科学省, p.103(2017)
- 2) 村田芳子, 「表現運動・ダンスの授業で身に付けさせたい学習内容とは?—学習内容と『習得・活用・探求』の学習をつなぐ—」体育科教育56(3), pp.14-18(2008)
- 3) 生関文翔・岩田昌太郎, 「小学校教員におけるリズム系ダンス指導の悩み事に関する調査研究—性別・校種・ダンス指導歴および教職経験年数の差異を手がかりに—」日本教科教育学会誌 第42巻第1号, pp.65-74
- 4) 畑野裕子・久山素子, 「小学校体育科における『表現運動』の授業実施に関する現状と『表現』の授業実施促進への課題—K市立小学校教員を対象とした調査から—」神戸親和女子大学 児童教育学研究29, pp.93-107(2010)
- 5) 堤雅雄, 「想像的他者との心理的距離の関数としての羞恥心」島根大学教育学部紀要(人文・社会科学)26, pp.87-92(1992)
- 6) 内山須美子・松尾健太・奥山美希, 「ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析—中学生の『現代的なリズムダンス』の授業を事例として—」白鷗大学教育学部論集7(1), pp.71-108(2013)
- 7) 畑野裕子・久山素子, 「学習者の経験からみた体育科の学習内容に関する—考察—表現運動(表現・リズムダンス・フォークダンス)を中心に—」神戸親和女子大学児童教育学研究, pp.139-154(2017)
- 8) 森脇康人, 「表現運動領域の学習における『恥ずかしさ』の検討—『恥ずかしさ』軽減のきっかけに着目して—」鳴門教育大学修士論文(2019)
- 9) 佐々木正人, 「アフォーダンス 新しい認知の理論」岩波書店, p.60(1994)
- 10) 佐々木正人, 前掲書, p.60(1994)